

関東地方の地理的特徴と代表的な農林水産業

関東地方は約4000万の人々が暮らす、最も人口が多い地方です。日本最大の平野である関東平野を中心に関東山地や越後山脈、阿武隈高地に囲まれ、利根川、荒川、多摩川などの川沿いの広大な低地には水田が広がります。台地は箱根山や富士山の火山灰が堆積してできた赤土（関東ローム）におおわれ、多くは畑作地域になっています。都市向けに野菜や果物、牛乳、鶏卵などを生産する近郊農業が発展し、交通網の整備とともに生産地は都市周辺へ拡大していきました。

内陸部

内陸部は台地や山地が広がっています。冬は“からっ風”と呼ばれる冷たい北西風が吹き、乾燥していますが、夏は高温で蒸し暑く雷雨が多く発生します。

南部沿岸

南関東を中心とする海沿いの地域は黒潮が近海を流れているため冬でも温暖なのが特徴です。房総半島や三浦半島では冬に観光農園で花摘みができることで知られています。

豆知識

近郊農業とは

市場に出荷する野菜や果物、花は新鮮さが求められるため、大都市近郊で行われている農業のこと。

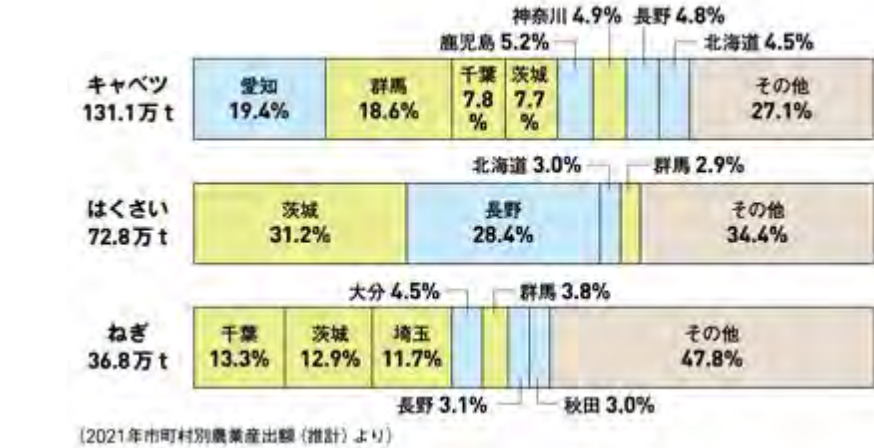


日本の面積・人口に占める関東地方の割合

面積 38万km ²	九州 11.8%	中国・四国 13.4%	近畿 8.8%	中部 17.7%	関東 8.6%	東北 17.7%	北海道 22.0%
人口 1.2億人	11.3%	8.6%	17.7%	16.7%	34.8%	6.7%	4.1%

(総務省統計局令和4年推計人口データより)

主な野菜の出荷量の県別割合



内陸部の農業例

埼玉県武蔵野地域

世界農業遺産

日本農業遺産

「大都市近郊に今も息づく武蔵野の落ち葉堆肥農法」

火山灰土に厚くおおわれたやせた土地に、江戸時代から木々を植えて平地に林を育てました。その林の落ち葉を集め、堆肥として畑に入れて農業ができる土をつくることで、さつまいもやほうれんそう、さといもなど多様な農作物の安定した生産を実現しました。



武蔵野の落ち葉堆肥農法が生み出す景観

武蔵野の落ち葉堆肥農法の歴史

江戸の急速な人口増加による食糧不足のため、川越藩が1600年代から開拓を行ったことから始まりました。台地で水が乏しい上に、火山灰土のため栄養分が少なく土が風に飛ばされやすいという、農業を行うには非常に厳しい地域でした。この自然条件を克服するため、見渡す限りの草原にコナラやクヌギなどの落葉広葉樹を植えて平地に林をつくり出し、落ち葉を堆肥として利用しました。

大都市近郊でありながら、今なお持続的な農業が続けられ、希少な動植物が生息できる環境を保つとともに、特徴的な農業景観を生み出しています。



希少植物キンラン



農地と一体的に配置された平地林

関東地方（茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）

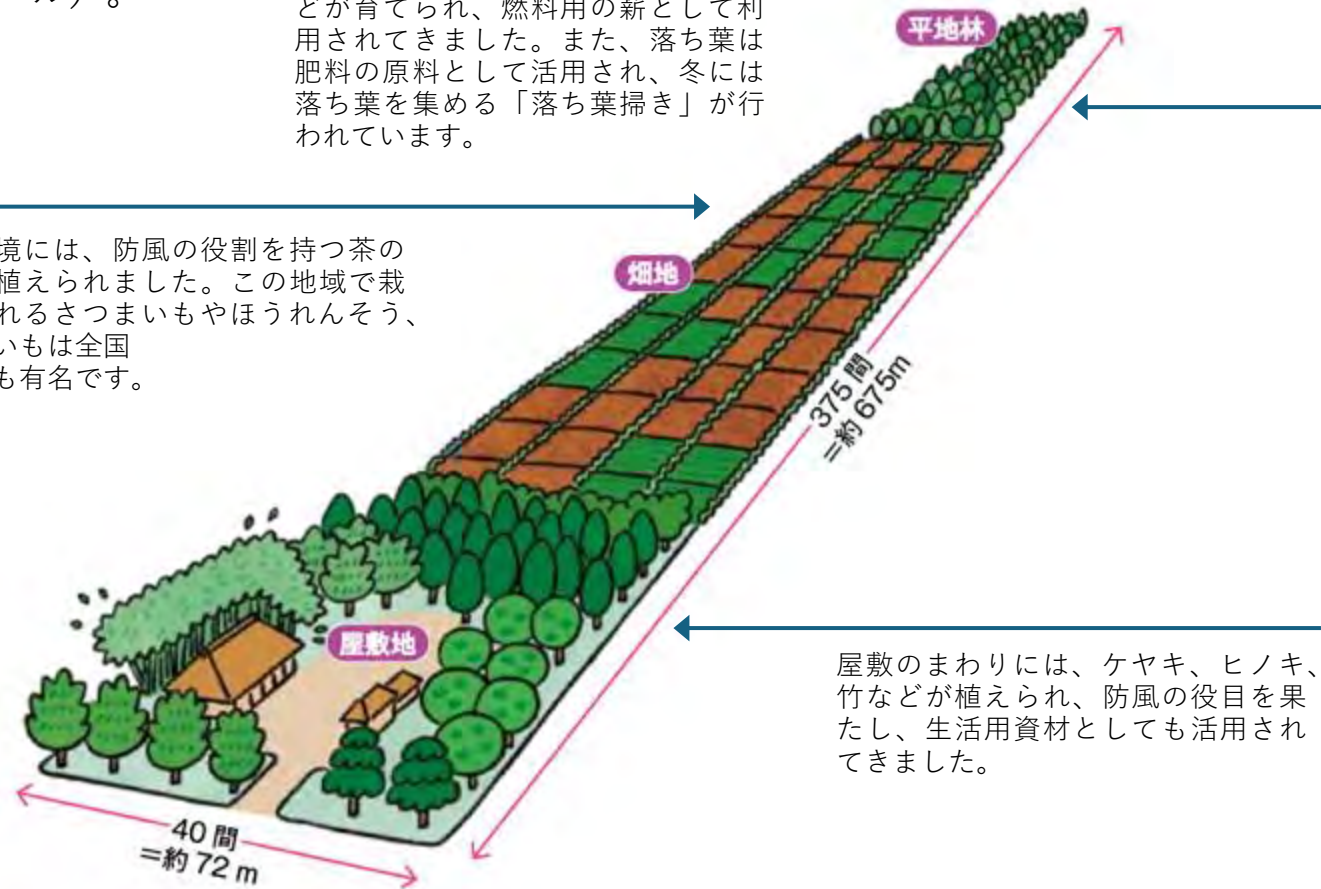
落ち葉堆肥農法の仕組み

一軒あたりの敷地は短冊のように細長い。広さは約5ha（ヘクタール）。



コナラ、クヌギ、エゴ、アカマツなどが育てられ、燃料用の薪として利用されてきました。また、落ち葉は肥料の原料として活用され、冬には落ち葉を集める「落ち葉掃き」が行われています。

畑の境には、防風の役割を持つ茶の木が植えられました。この地域で栽培されるさつまいもやほうれんそう、さといもは全国的にも有名です。



落ち葉を生み出す平地林



落ち葉掃き



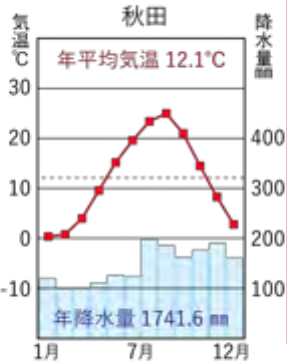
堆肥場

屋敷の周りには、ケヤキ、ヒノキ、竹などが植えられ、防風の役目を果たし、生活用資材としても活用されてきました。

東北地方（青森県・秋田県・岩手県・宮城県・山形県・福島県）

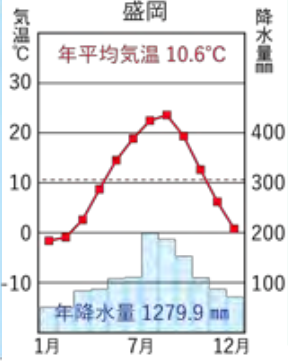
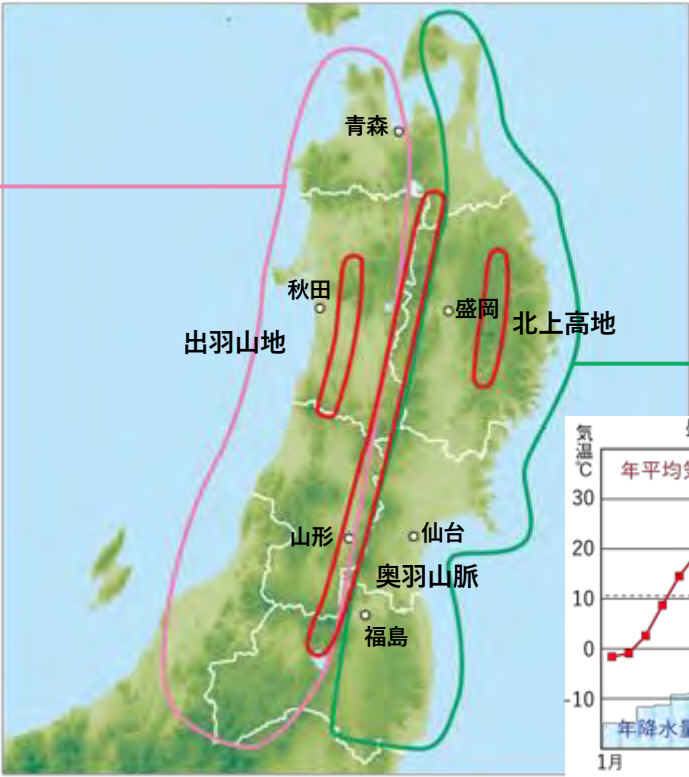
東北地方の地理的特徴と代表的な農林水産業

中央に奥羽山脈が連なり、これを境にして日本海側と太平洋側では気候が大きく異なります。奥羽山脈の西に出羽山地、東に北上高地が伸びています。山地からは北上川や最上川など大きな川が流れ出て、下流には仙台平野、庄内平野など平野が広がります。山地の間には北上、山形、会津盆地などの盆地があり、こうした平地に人口が集中しています。東北地方の平野や盆地では、豊富な水を利用した米づくりが盛んで、日本有数の稲作地帯です。東北地方の各県には、稲作や畑作などと結びついた数々の伝統行事が受け継がれています。



日本海側

夏は晴天の日が多く気温も高くなりますが、冬は北西の季節風と対馬海流の影響を受けて雨や雪が降りやすくなります。



全国の米の産出額に占める東北地方の割合（令和4年産）



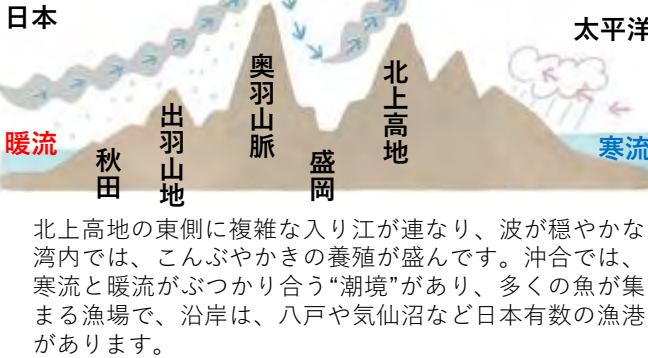
（農林水産省
「生産農業所得統計」
令和4年産より）

太平洋側

オホーツク海高気圧から“やませ”と呼ばれる冷たく湿った北東の風が吹き出すことがあり、この冷気や霧による日照不足で夏でも気温が上がらない日が続くことがあります。

冬の風 しめった空気

夏のやませ



太平洋側（平野）の農業例

宮城県大崎地域

「持続可能な水田農業を支える『大崎耕土』の伝統的水管理システム」

世界農業遺産

日本農業遺産

この地域は伝統的な稲作地帯ですが、冬は北西からの冷たい風、夏は東北の太平洋側に特有の北東の北風「やませ」による冷害や地形によって引き起こされる洪水、渇水に長年にわたり悩まされてきました。その結果発達した巧みな水管理の仕組みや屋敷を守る林「居久根（いぐね）」などにより、災害に強い農業・農村をつくってきました。



水田と水路、屋敷林「居久根（いぐね）」がつなぐ大崎耕土

豆知識

「居久根（いぐね）」ってなんだろう？

水田に浮かぶ森のように見える屋敷林「居久根（いぐね）」とは、イは「住居」、クネは「垣根」を意味し、冬の季節風（北西の風）から母屋や畑を守るため幾重にも樹木が植えられた林です。ここでは稲の害虫の天敵となるカエルなどの生きものも数多く生息しています。また、天災や飢餓に備えて実のなる木が多く植林され、屋敷内には身近な野菜の栽培を行ったり、野菜の保存に使ったりする庭もあります。厳しい自然条件の中で生活する人々の知恵です。



水田に浮かぶ居久根（いぐね）

伝統的な水の管理

江戸時代から大崎耕土を流れる江合川・鳴瀬川の河川流域に約1,200か所に及ぶ「取水堰」や「用排水路」「ため池」「遊水地」などが設けられ、現代でも受け継がれています。取水堰は、河川から農業に使うための水を引き入れるための仕組みです。

大崎耕土が育む食文化

冷害や洪水へ対策する努力を続けながら、米・麦・大豆の三大穀物、地域特有の伝統野菜など多くの農産物を生産してきました。これらの豊かな原材料をもとに、味噌や日本酒など県内有数の発酵食品産地として豊かな食文化が育まれています。

年間を通して行われる水調整

